

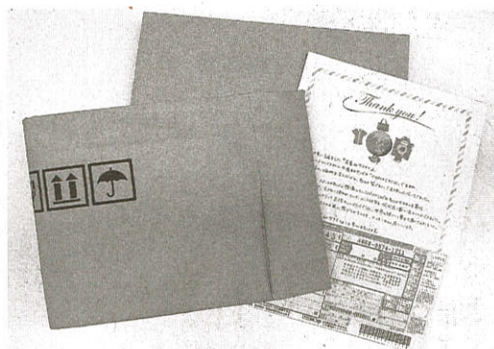
何となく、常にどこか緊張している自分に気づいた四月初め。気持ち落落ち着かせるためにも、不用品の整理をしようと思いついた。友人が「これ、オススメ」と教えてくれたのが「古着deワクチン」という回収サービス。二千三百円(税込み)を支払い申し込むと、Tシャツなら百枚は入る回収袋が届き、服や雑貨などを詰めた袋を宅配業者に回収してもらうだけ。古着は、カンボジアやラオス、パ

『集こもり日記』

●「古着deワクチン」●

キスタン、ナイジェリアなど途上国に輸出され、現地でリユースされるという。料金の一部はNPOを通じて、こうした国の子どもたちの五分のポリオワクチン代に充てられる。反射的に申し込んだ。着られなくなった子ども服の選別は、成長を感じられて良かった。翻って自分のクローゼットをチェックするのは「ああ、これストレスたまって衝動買いしたやつだ」とか「わ、もうウエスト入らない」など自分のダメさを感じる時間だった。無事回収してもらいスッキリ、と思っていたところ、家にいる時間が増えた人たちが古着をどんどん出すため、回収業者がパンクしかかっている、というニュースを目にした。需要が急増する宅配業者の疲弊も聞かれるように。「そこまで考えな

今こそ、視野を広げて



「古着deワクチン」の回収袋のセット

ったな」。自分の心地よさを求めるだけで、その先に何が起きるのかまで見通せていなかった、とちょっと反省した。

気掛かりだったので、このコラムを書くにあたり、担当の今野優子さん(三毛)にあらためて話を聞かせてもらった。「例年の倍以上くらいに増えています、うちは今のところ引き受けられています」と聞きホッとしました。今野さんも「宅配業者さんあつての事業です」と感謝していた。今野さんは「ポリオがなくなるときがきたら、そのとき子どもたちの命を守るためにできることをまた考えたい」と話していた。ワクチンで根絶できる感染症であっても、その接種さえ難しい子どもたちがいるように、パンデミックに揺れる世界には、コロナ以前から厳しい状況に置かれた人たちがたくさんいる。狭くならがちな視野を今こそ、広げて暮らしていきたい。

(小林由比)